

## 浅田栄次の臨別書に思う

会員 小川 宣

一、はじめに

今年（平成九年）の六月一八日から一〇日間の日程で「英語教育のパイオニア浅田栄次博士資料展」が開催された。徳山市教育委員会と徳山地方郷土史研究会が主催し、徳山市中央図書館で行われたもので、延四五〇人が訪れ大変盛会であった。

私も折りを見て、数日間監視員の役を勤めたが、この資料展を通じて心温まるものを感じたり、また感動することもしばしばであった。

ある高校生は、初めて郷里徳山の生んだ偉人に出くわして深い感動を覚え、早速博士を顕彰して開催されている「ユネスコ英語弁論大会」への参加を決意した

という。そして、八月二四日の大会に参加してくれたのが大変嬉しかった。

資料を見学した多くの方から、今から九〇年前に二三歳の青年が、意を決してアメリカに留学する折りに記した『臨別書』についての質問を受けた。この『臨別書』は、別れを告げるために郷里徳山に帰り、その時の思いを記したもので、その一語一語に深い感銘を覚えたようであった。私も見学者にいろいろ説明しながら、何度か鼓動の高まりを覚えた。

一方あるお医者さんは、浅田博士に興味を抱き七月上旬にアメリカに行く予定があるので、その折りに是非シカゴ大学を訪問したいと思うのと、熱心に見学

された方がおられた。シカゴ大学の訪問に際して、誰か紹介して欲しいとのことなので、同大学図書館の日本部長である奥泉栄三郎さんを紹介することにした。

帰国されると、早速シカゴ大学に関わる大変有意義な楽しい報告を受け、心温まるものがあつた。このお医者さんの所属されている医療法人の理事長さんは、常日頃から博士に大変関心をもっておられることもあつて、「浅田栄次賞」の副賞としてシカゴ大学への派遣費用を負担してもよいとの申し出があつた。八年前に「浅田栄次賞」が創設された時からの念願が、ようやく実現の運びになりそうで、関係者一同感激しているところである。

## 二、浅田栄次との関わり

私が浅田栄次に特に関心を抱いたのは、私の家にある資料を通じて祖父清次と極めて密接な関係にあることを知つたからである。浅田側から見ても大変大事な人の一人であつたことを、いろいろな資料を通じて知

る機会に恵まれ二重の喜びであつた。

この二人の関わりは、『浅田栄次追懐録』の記述の中に、少年時代の友情の深さを感じさせるものがあり、また祖父の『備忘記』に山口中学校の様子が、さらに『述懐録』の中に広島大学の様子の一端が記されている。その外、往復の書簡に、また曾祖父の金婚式に寄せられた実に心温まる二枚の短冊があり、その一枚に五十年も ちぎりかわらぬ おし鳥の

おがはにあそぶ さまはうれしき

とある。さらに膨大な日記に二人の仲の良さを彷彿させるものが幾つかある。

一方、栄次の叔父野田祐のことが『臨別書』をはじめよく登場するが、この野田祐も祖父と深い関わりのある人物の一人である。即ち、祖父の妹多賀が明治二四年に野田祐の養女となり、その後同家の養子武治と結婚している。終戦の翌年昭和二年四月に台湾から引き揚げた私たちは、当時熊本に住んでいた野田家に大変お世話になつたことがある。思えば、栄次と清次

の友情を通じて浅田家と小川家は親類のようなつながりが感じられて、何となく嬉しくなったものであった。というのは、祖父は四〇代の若い時から隠居して、短歌に夢中になっていたものとはかり思っていたので、この偉大な栄次との関わりを知って、祖父へのイメージが一転して、尊敬の眼に変わったからである。

### 三、『臨別書』について

この資料の表題である『臨別書』は、留学を決意した浅田栄次がその決意を記した最後の部分に「千八百八十八年三月十一日臨別書 浅田栄次」と記されていることから、栄次の亡くなった直後に出版された『浅田栄次追懐録』に収録する際に付されたものと思われる。

私たちは、よく表題のない覚書や書簡に出くわすことが多い。こんな時、目録を作る必要がある時には、その内容に因んで勝手に表題を付けることがしばしばである。毛利元就の書状でいうと、俗に『教訓状』と

称されている三人の子に宛てたものも、その一つだといえそうである。

この書状には、もちろん表題は記されていないので、それぞれの思いで勝手に表題を付けることになる。

「霜月二十五日に元就が隆元・元春・隆景の三人の子に宛てた書状」とするのが最も無難である。しかし、この書状には、それぞれの時代の世相を反映しながら、幾つかの表題が付されているが、中にはかなり飛躍したものもある。いわく、「三子への教訓状」「三子の訓」「三矢の訓」「三本の矢の教え」「十四か条の教訓状」などである。

したがって、この『臨別書』は、全く無理のない最も適した表題といえる。およそ九〇〇字の文面であるが、四九年の生涯における前半の二三年間のことが、実に要領よくまとめられていて、随所にその赤裸々な人間性を垣間見ることができるといえる。肖像画の近寄りがない威厳からは、想像もできないような実に愛すべき人物なのである。

私の祖父の履歴書や述懐録と重ね合わせると、徳山で過ごした小学校時代は極めて秀才で友人思いであり、中学校時代は勉学に大変厳しかった反面、かなりやんちゃだったことが知られ、微笑ましささえ感じさせる。東京へ出てからは、かなりの艱難辛苦を味わいながら刻苦勉励した姿が彷彿させられ、その中から洋行を決意した遅しさが伝わってくるようである。

しめくりの数行の文からは、今の若者に少なくなつた明治時代の礼儀の正しさ、幕末・維新の律義な壮士の姿を想起させるような心が甦ってくるようである。吉田松陰の親を思う心と重ねながら、父母・兄弟・親戚を思い、朋友を大切にして、受けた恩は忘れないという真面目さが伝わってくる。当時異境に赴くには、大変な決意を要したであろうことが、終わりの「再び帰って岐山を仰ぎ、鼓海を臨むは果たして何れの日ならん。生命は人の与かる所にあらざるなり」の文によく表れている。

因みに、私の祖父清次も栄次と共に渡米したかった

余(訓)紀元千八百六十五年六月十一日(一)以上方州花岡外祖父  
上原勤兵衛・家生七七日名祖父徳山先侯三請  
子榮次、名ヲ受テ生テ散騎虚オアリ、知人ニ稱讚セシレ  
心竊ニ愧ツ幼ニテ噢諫館ニ入り、經史ノ素讀ヲ學フ  
後、其化ニ櫻馬場小塾トセシ及ヒ格ヲテ普通學ヲ  
脩メ、千八百七十五年三月於テ擇ビテ助導トシ、更ニ岐陽  
學舎ニ入り、又ハ高曲ナル科學ヲ脩ム、然レハ性質驍捷、暴  
ナカ故ニ職ヲ利カレ、再ビ小塾學生徒トナル、卒業シテ  
復タ授業生トシ、岐陽小學ニ出入ス、其際詩文ヲ學ビ、  
數理ヲ究メ、漸ク自己ノ學識安シシ、郷村ヲ誇リ、也アリ

千八百六十年二月始メテ洋學ヲ脩ムルカ、其ルヲ知志ヲ決  
シテ山中學校ニ入り、英學漢學數學ヲ脩ム、居ルハ九月  
去テ廣島中學校ヲ轉シ、到ル處誤テ勉強家・名ヲ  
得、隨テ自ラ高ク志スル心アリ、余カ性演説討論ヲ好ミ、  
自ラ議論家ヲ以テ居ル、其歳十一月放頭、大山東ヲ  
逐テ、議起リ、生徒惣代數名ヲ撰ビテ、校長ニ請ビ  
抗辯屈セス、余遂ニ退校ヲ命セラル、父母余ニ歸ラ、勸  
ム余聽カステ、京都ニ生キ、市上ニ彷徨ス、且ニ余カ父母  
ノ命ニ逆ラ、始メテ又タ辛酸ヲ嘗ル、始メテ後、父母ノ  
嚴命ヲ受ケ、親戚ノ戒諭ヲ聞キ、志ヲ挫キ、鄉ニ歸リ、復メ

英書ヲ見ス時ニ千八百八十一年一月ナリ七十餘日ヨリ過キテ  
 叔父野田 祐 余ニ遊學ヲ勸メ余カニ為ラズ金錢ヲ地  
 トス余跳テ京都ニ至リ京都中學ニ入リ脩學三年  
 中學ノ課程ヲ卒ヘ東京ニ向ハントス父母ノ聽カレテ  
 恐レ告ケスニテ東遊ス東京ニ入り危險ヲ冒シ辛酸ヲ嘗  
 ヲ終ニ千八百八十四年四月工部大學校ニ入り謔テ官費  
 止ニ擇リ自負心愈熾ナリ 在學中基督教ヲ信シ  
 學識隨テ進ミ教理隨テ明カニ覺ラ然レモ信仰甚薄  
 千八百八十六年三月學制改革 陸軍大學預備門ニ  
 轉屬シ十九日ニテ帝國理科大學ニ入り數學ヲ專

脩ス工部大學校ヲ出テシヨリ 脩學ノ志ニテ資金ノ道ニ  
 遂ニ米國宣教師ノ譯官トナリ 總ニ學費ヲ求ム或ハ  
 書ヲ譯シテ之ヲ賣リ或ハ學舎ニ行テ人ヲ救ヘ 困難頗ル  
 大ナリ千八百八十八年一月突然洋行ニ志シ親戚  
 朋友ノ援助ヲ得テ米國ニテニエリシ遊ヒトシ 郷歸  
 テ別テ父母兄弟親戚朋友ニ志シ在米三年ヲ期ス或  
 氏明日ニ奉余之ヲ知ラス今去テ異境ニ向テ再ニ歸テ  
 岐山ヲ仰キ鼓海ニ臨ム果シテ何レ日ナラシ生命ハ人  
 共ニ所ニテラザルナリ  
 千八百八十八年三月十日 臨別書  
 淺田 肇 次

ようであるが、家庭の事情などによって実現しなかつたことを、大変悔いていたそうである。その思いの一端を親友栄次に託した思いが、往復書簡の中からも伝わってくるようである。この時代に栄次の果たした役割は、在米中はもちろんのこと、帰国後も日米の架け橋として、立派に親善の役を務めているようで、正に「明治の国際人」といえよう。

臨別書 (現代訳)

私は、紀元一八六五年(慶応元)六月一日(新曆)に防州花岡の外祖父上原勘兵衛の家に生まれ、七日たつても名がない。祖父が徳山老侯にお願ひして栄次(4)の名前を受け、生まれながらの微弱虚才であったが、郷里の人に賞賛され心竒かに恥じる。幼くして興讓館(5)に入つて、経史(6)の素読を学ぶ。後に桜馬場小学になつて始めて普通学を修め、一八七五年(明治八)三月に選ばれて助導(7)となり、更に岐陽学舎に入り、少し高尚な科学を修める。しかしながら、

性質は躁暴であつたので職を剥がれ、再び小学生徒となる。ついに卒業して又<sup>8</sup>授業生となり、岐陽学舎に出入りす。この際、詩文を学び数理を究め、漸く自己の学識に安心して郷村に誇りを覚える。

一八八〇年（明治一三）二月、始めて洋学を修めなければならぬことを知り、志を決して山口<sup>9</sup>中学校に入学して、英学・漢学・数学を修める。在学すること五か月にして、山口を去つて<sup>10</sup>広島中学校に転校し、到るところ、誤つて勉強家の名を得る。従つて自ら高慢な心を覚える。

私の性格は演説・討論を好み、自ら議論家だと思ふ。この年の一月に教頭大山某を追放するといふ議が起こり、生徒総代数名を選んで、これを校長に願ひ、抗弁に屈しなかつたので、私はついに退校を命ぜられる。父母は私に帰ることを勧めらる。私は聞かないで京都に行き、市中を彷徨する。これは私が父母の命に逆らつた始めであつて、又

辛酸を嘗めた始めである。

後に父母の厳命を受け、親戚の戒め諭しを聞いて、志を砕いて郷里に帰つて、又英書を見なかつた。時に一八八一年一月のことである。七〇余日が過ぎて、叔父野田祐が私に遊学を勧め、私のために金銭を援助しようという。私は喜び勇んで京都に至り、京都中学に入学して、修学三年で中学の課程を卒えて、東京に向かおうとした。

父母が聞き入れないのを恐れて、告げないで上京した。東京に入り、危険を冒し辛酸を嘗め、ついに一八八四年（明治一七）四月に<sup>11</sup>工部大学校に入学し、誤つて官費生に選ばれ、自負心はいよいよ盛んになる。在学中に基督教を信じ学識も従つて進歩したように思える。しかしながら信仰は甚だ薄く、一八八六年三月学制改革の際、<sup>12</sup>東京大学予備門に転属し、一五か月で<sup>13</sup>帝国理科大学に入学して数学を専修する。

工部大学校を出てからは、修学の志はあるけれ

ども資金の道がない。ついに米国宣教師の訳官となつて僅かな学資を得、或いは書物を訳してこれを売り、或いは学舎に入つて人を教え、困難を極める。

一八八八年(明治二二)一月、突然洋行の決断をし、親戚朋友の扶助を得て、米国ニューヨークに留学しようと、郷里に帰つて別れを父母兄弟親戚朋友に告げる。在米三年を期すと雖も、明日のことは私には分からない。今去つて異境に向かう。再び帰つて岐山を仰ぎ、鼓海を臨むのは果たして何れの日であろうか。生命は人の関係するところではない。

一八八八年三月一日臨別書

浅田 栄次

注 (解説)

(1) 栄次の誕生日は、履歴書等によると四月二八日  
で、太陽暦では五月二二日である。

(2) 浅田家六代信實(仮名五郎右衛門)、五代顕行の養子で文政三年家督を継ぐ、徳山藩御蔵本付一五石。父は七代信義(仮名澄平後に利左衛門)後に平作

(3) 徳山藩九代藩主毛利元蕃

(4) 後に博士は「長男にして栄次というのは、次も栄えるようにということと名付けられたものである」と述べている。

(5) 徳山藩の藩校、桜馬場小学・岐陽学舎・岐陽小学は、いずれも徳山小学校の前身

(6) 経書(四書・五経)と歴史

(7) 教員の不足を補うために設けられたもので、その職務は教員と異なることはなかったという。当時の助導・授業生に、兼崎茂樹・伊藤喜久衛・井上一男・小川清次などがある。

(8) 徳山から栄次が率先し、友人の小川清次・栗屋登吉・池田龍作の四人が入学している。

(9) 栄次が率先し、友人の前記三人も、次々に転入

している。

☆ 当時の広島中学校の状況について、小川清次はその『述懐録』の中で、次のように記している。

「当時の同校は数名の外国人を招聘し、尤も語学に重きを置きたるなり。しかるに転校とほとんど同時に経費その他の事故により、他国人を悉く解雇し、一方に設備を縮小すると校規振るわず、しばしば教員と生徒間に葛藤を生じ、大いに校長および教員に不信任を訴える等、特に外国人に対する待遇を異にする等種々の弊害百出、到底長く我が学庭にあらざるを見て、決然去りて東京に遊ぶ。」

(11) 東大工学部の前身で、一八七七年(明治一〇)に設立されたが、一八八五年(明治一八年)に工部省の廃止にともない文部省に移管され、翌年東京帝国大学に統合された。栄次が在学したのは丁度移管される時だったようである。この工部大学の果たした役割は極めて大きかったようで、東

京駅の設計で知られる辰野金吾や琵琶湖疏水を完成させた田辺朔郎ら多くの先輩がおり、栄次はこの道でも彼等と肩を並べるような功績をあげたものと思われる。

(12) 第一高等学校、後の第一高等学校・東京大学  
教養学部

(13) 東京大学の前身

☆ (参考)

徳山を後にした栄次は、これまでに学資や渡米の費用を出してくれた叔父野田祐に挨拶するため下関を訪れ、三月二十七日に横浜港からカナダ行き「パーシャ号」に乗り、アメリカ留学の壮途に立った。臨別書には「在米三年を期す。」と記されているが、五年余り滞在一八九三年(明治二六)七月、シカゴ大学院で初めての「ドクトル・オブ・フィロソフィ」の称号を土産に帰国している。